に讀み易くなし能ふ問題であつたと思ふ。なほ言へば、許す限り上欄に空白を殘して索出の便を計るとか、行間を開いて文書の品格を保たしめるとか、もう一段の注意や親切が欲しかつたと思ふ。更に圖版の存する文書と讀本を照合したところ、早くも一、二正誤表に載らぬ不覺を見出したことは、返す〳〵殘念なことであつた。圖版も餘り推賞し得ないし、裝幀も甚しく品位を缺く。

さはいへ近頃出版のことは、頗る窮屈になり行くといふ。是らの不滿もさうした種々の條件に災せられた點、少しとしないであらう。今や　天皇の御聖德を追慕し奉り、國體の本義にもとづく崇高なる御精神を、永へに仰ぎ奉るべき時に當つて、本書の出版せられたることを、深く慶賀するものである。(菊版、假綴、本文三七四頁、圖版二十四葉、非賣品)〔林屋辰三郎〕

滿蒙の民族と宗教

赤松智城・秋葉隆共著

滿蒙の諸族は古く我々と民族的にも文化的にも近親な關係を持つ民族である。我が民族文化の幾割かゞその源流をこの方面に發するとの豫想は必ずしも失當であるまい。また新しい政治關係の方面よりするも、日露戰役以後この地域が國家的に如何に重要性を持つものなるかは我々が身を以て體驗して居る現實であり、滿蒙が我が生命線的存在として我々に對して在ること既に三分の一世紀に達して居る。にも拘らず、この境域に對する人文的研究は史學を除く外概ね不振であり、取りわけ民族學的研究に至つては餘りに貧弱であつた。今日まで滿蒙民族に關する研究資料と學說の殆んどは歐米諸學徒の勞作に負うて居る實情である。誠に殘念な事實である。好學的な期待からのみそれを悲しむのではなく、我が國家の政策と文化能力を反省せざるを得ない氣持にさへなるのであつた。が幸ひこゝ數年來かうした失望と不安とは幾分消去されつゝあるは慶賀すべきであるが、この時に當り赤松秋葉兩教授の本書を迎へ得たことは大旱に雲霓を望み得た氣持である。

本書は先頃公にされた同著者の「朝鮮巫俗の研究」の姉妹篇にしてその構成もほゞ前著に準じて居る。本書は本文四一六頁の外に二百葉に近い寫眞を參考圖錄として居り、僅かな紙面で全貌的によく紹介することは困難である。以下その節目を列記的に揭げ、本書未讀の諸彥の參考とし度い。

第一、總說——北アジヤの民族と文化、薩滿教の意義と起原、滿蒙宗教の系統と類型の三項よりなり、シベリヤ及び滿蒙に於ける民族及び宗教に關する今日までの歐米學徒の諸研究を批判しつつその採るべきを採り、以て本書の企圖する研究への準備的知識を供して居る。思慮深い著者は概ね斷定的な論說を避け、問題を多く後日にゆづられて居るが、吾人のこの概說によつて得るであらうところの便宜は少くない。シベリヤ及び滿蒙諸族の民族關係とその文化系統とは甚だしく錯綜して居り、その高次的複合性の故に吾人の理解を常に困難ならしめて居るのであつて、この方面の人文研究に觸れたものは何人でもこの點で少からず困惑した經驗を持つて居よう。この意味で總說の說くところはよき入門的指

導としても亦恰好なものであらう。

第二、オロチョン族――大興安嶺オロチョン族に關する實地踏査の報告である。「從來人喰人種と噂されたオロチョンのキャムプを訪ふことは、私の年來の宿願でもあり、山中の相當の危險を冒し、困難と戰ひつゝ、土人と起居を共にして、現地採錄寫眞撮影及び參考品の蒐集を行ふことを得た」てふ Field work の成果にして、本書中最も興味ある部分である。讀者は「オロチョン踏査旅行記」によつて著者と共に大興安嶺を越え、オロチョンの社會に入り、彼等の環境と生活を味はふことが出來る。この彼等と共にあり得る讀者の氣持が、環境と民族、氏族とキャムプ、テントと家族、社會階級、オロチョン氣質、シャマニズム、參考品解說の各項の理解を情緒的にまで深めて與れる。かゝる原始的狩獵民族の日常生活の諸樣態又原始社會の種々な特色たる狩獵の實際の仕方、それに伴ふ諸慣習族外婚的社會組織、その連帶の形としての家族とキムヤプ集團の有樣、シャマニズムの具體的な行はれ方、又彼等の心理に關しては社交贈答に於ける原始的虛榮或は硬教育が生活環境と如何に聯關して彼等の心理を形成するか、或はより高等な文化民族と接觸する場合如何なる狀況を生ずるか等、原始民族の社會生活の諸問題がすべて有機的な關聯を以て描き出され、民族學社會學に關心を抱く人々に有益な資料や示唆を與へるであらう。

又支那塞外史諸傳に見る簡明な言葉で片付けられた記事の內容はかゝる實情報告により理解を助けらるゝ事も少しとせぬであらう。尙附載された吉岡義人氏の手記も十數回大興安嶺に住むオロチョン族を踏査宣撫せられた人の體驗記だけに讀者を教へ感ぜしむるものがあるであらう。

第三、赫哲族――近時 Lotimore や凌純聲の研究報告でなじみ深い感じのする部族であるが、邦人として始めて蘇々屯に赫哲族を探訪した著者の、彼等の生活形態、社會組織、宗教に關する報告である。量的には多くはないが、前二書の足らざるを補ひ、兩兩比較して興味深い。

第四、滿洲族――既に自らの民族文化の殆んどを失つてしまつた今日の滿洲族であるが、なほ特殊な滿洲族の間から過去的なもの民族固有的なものを探り出さうと努められた報告である。內容は黑龍江畔牡丹江上流阿城地方の滿洲族の概述、滿洲族の家祭、滿洲族人の祭祀、薩滿の祭祀と祝詞の諸項から成つて居る。後二者に關しては「馬佳氏祭祀禮儀淸册」及び「祭祀全書巫人祔念全錄」てふ滿洲人の古書を紹介し或は譯述されたものであるが、何れも吾人の見難い書物であるだけに貴重な資料である。

第五、蒙古族――興安省方面の奥地の蒙古族の調査報告にして、內蒙古の宗教的年中行事、鄂博と鄂博祭、蒙古薩滿の行事、蒙古人の薩滿論、現代蒙古青年の宗教意識、蒙古文化と漢文化、喇嘛廟の行事の諸項から成つて居る。右の內宗教的行事に關しては民族固有とも云ふべき北方系（シベリヤ系）要素がラマ教的要素及び支那文化要素と混和輻合して彼等の文化構成の顯著なる相貌を示せるを指摘し、又鄂博に關して附言された朝鮮の堆石の聖

所との比較は興味ある示唆の一である。蒙古人の薩滿論はダフール蒙古族中の有識者たる烏爾恭博的氏の「薩瑪論」を譯述紹介されたもので、次の現代蒙古青年の宗教意識の調査と共に、將來に於ける彼等の教化指導上よき參考たり得よう。蒙古文化と漢文化の項に於いては文化傳播に對する民族接觸と文化形相との關係を論考し、この民族に關しては、物質的漢文化が精神的漢文化よりも廣範に且よりよく傳播せることを指摘し、文化構成論への好資料を提供して居る。

第六、漢民族——跳大仙踏査記、跳單鼓と跳大神、儒教と道佛二教、漢民族に於ける職業の貴賤の諸項。

第七、回教徒——滿洲國の回教。

以上簡單な紹介を終へた。滿蒙の地を未だ一度も踏まざる筆者が、Field work に成るこの勞作を机上で批評するが如きは憤むべき業であるばかりでなく、それ自體甚だしく非學究的なことである。異民族の間へ探訪に出かけた經驗を貧しいながらにも持つ筆者は、本書の一葉の踏査地圖をさへ我身につまされて見入ること屢々であつた。些細な數行の報告の裏面に數十里の難行の旅路が横たはつて居ることもあらう。さうした成果を易々と机上で通讀し得ることは何としても感謝すべきである。

本書は二著者の共著であり、またその内容も統一的な體系の下に論述されたものでもなく、一面論文集的な性質を持つものであり、讀者の内にはこの點或は物足らなさを覺えるかも知れない。がそれは著者の將來の論著に期待してよいことであらう。この先導的好著の後につゞくものを、著者からも亦他の新進學徒からも、吾人は期待して止まない。なほ著者が序文に「また東亞文化工作上の基礎的研究のために聊か寄與する所がありとすれば云云」と時局柄持つところの關心を示されて居るが、それは具體的に本書後半の諸篇に於いて提示されて居ると云ふべく、從つて本書は獨り專門學徒への書たるのみならず、廣く現下時代人の參考とすべき好著でなくてはならぬ。(四六倍版本文四一六頁、參考圖錄一〇〇頁、外に地圖、索引、大阪屋號書店發兌、定價拾圓)(三品彰英、横田健一)

國學

——その成立と國文學との關係——

久松潛一著

本居宣長は古文献を讀む態度として、古の眼と今の眼を以てすべき事を說いて居るが、この事は單に古典を讀む方法に於て言つた事のみではなく、その言葉の中には古典が今に生命を有するものである事を指摘してゐるものがある。この事は亦國學自體に就いても言ひ得るものであつて、日本的立場に立つ新しき學問の建設が要請されつゝある今日、國學の研究が重要であるとされる根據は此所に存する。而して近時國學に關する幾多の研究が輩出する所以でもあらう。

勿論此等國學の研究にも諸種の傾向を有する。卽ち、大別すれば國文學史の立場よりするものと、歷史的な立場よりするものと